



盲ろう 当事者

応
般

盲ろう者が見る世界

—情報のインフラからコミュニケーションのインフラへ—

福島 智 (東京大学) 坊農真弓 (国立情報学研究所)

本稿は指点字通訳者を介して、坊農が福島さんにインタビューするという形で綴られる。

以下、「福島」は福島智さん、「坊農」は坊農真弓の言葉である。

盲ろう者とコミュニケーション

坊農 昨年の綾屋さんのソーシャルマジョリティ研究会セミナー^{☆1}で、私の講演を聞いていただきありがとうございました。その後お送りいただいた先生のご著書『盲ろう者として生きて』(2011年、明石書店)を読ませていただき、とても感動しました。今日はいくつか福島さんにお聞きしたいことがあります。

福島 どうぞ、なんでもお尋ねください。

坊農 東京盲ろう者友の会のWebサイトで、「盲ベースの盲ろう」「ろうベースの盲ろう」という区別があるということを見つけたのですが、これらの違いについて教えていただけますか。

福島 盲ベースの盲ろうというのは先に視覚を失ってその後聴覚を失う盲ろう者のことをいいます。また突然両方を失う場合は、「健常ベースの盲ろう」とでも言うべきかもしれませんが、音声言語がその人のコミュニケーションのベースになっているという意味では、こちらに入ります。ろうベースの盲ろうとは先に聴覚を失ってその後視覚を失う盲ろう者のことをいいます。

坊農 盲ろう者のコミュニケーション手法とは一体どのようなものですか。

福島 私は9歳で失明して、18歳で失聴しました。コミュニケーションには指点字を使います。この方法は母と私で作りました。左右の人差し指から薬指までの指を点字タイプライタの6つのキーに見立てて、対話相手や指点字通訳者が同じく6本の指を使って私の6本の指に点字を打ちます。この点字を読み取って、私は音声で返事をします。たとえば坊農さんの音声発話を指点字通訳者が指点字に代えて打っています。坊農さんの発話はデジタル情報、すなわち文字情報として指点字に変えられますが、坊農さんが熱心に話そうとなさっているといった非言語的な様子も、熟達した指点字通訳者の場合、その打ち方から伝わってきます。

坊農 実は私のオーストラリアの共同研究者が触手話通訳者をされていて、福島さんを一度ヘレンケラー会議でお見かけしたと話していました。福島さんの指点字は世界的に見て珍しいものだとお聞きしました。

福島 ああ、ヘレンケラー世界会議のことですね。4年に一度開催されています。一度都合で行けなかったのですが、ほぼ毎回参加しています。私はオーストラリアには行ったことがないのですが、ニュージーランドでの会議に参加したときにお目にかかったのかもしれないですね。

坊農 ああ、確かに。

福島 私は1989年スウェーデンで開催された第4回ヘレンケラー世界会議に出席して、「My Life and My Finger Braille」というタイトルの講演をしました。失聴して7～8年といったころだったので英語で講演原稿を読みました。その原稿が会議資料に収録されたのですが、そのときも世界

^{☆1} 綾屋紗月氏により2014年度に東京大学先端科学技術研究センターで実施されたセミナー。詳しくは本特集の綾屋氏の記事をご覧ください。



的にも例がないコミュニケーション手法だという反響がありました。

坊農 そうなんですね。

福島 まあ、布教活動みたいなこともしていないし、あまり使う人はいません。盲ろう者は世界的に見れば、手のひらに相手の指でアルファベットなどを書いてもらって読む「手書き文字」(print-on-palm)か、触手話(tactile sign language)を使うことが多いです。でも、触手話を使うにしても、文書を読み書きするには点字を覚える必要があります。また、手話は日常会話にはいいかもしれませんが、会議とか事務的な話をする場合は点字のほうが便利な場合もあります。福祉業界は行政とのやりとりが必要な領域なので、点字で文書を作成するスキルは大切になってきますね。

..... 当事者としての要望

坊農 コミュニケーション方法を場面によって使い分けるといってお話ですね。それは興味深いです。

福島 えっと、この対談の趣旨というか、どこを指してお話するかについて教えていただけますか。

坊農 すみません。説明が下手で。今回の特集記事

は昨年秋に情報処理学会に発足したアクセシビリティ研究グループ(以下、AAC)の趣旨を説明する目的があります。AACは単に情報処理技術の研究開発を発展させるだけではなく、障がい当事者が研究の主体として参加できる環境の整備を進めたいと思っています。

福島 なるほど。では、情報処理技術に対する当事者としての要望を言ったらいいんですね(笑)。

坊農 そうですね。

福島 情報処理、情報学ってどういった学問でしょうか。

坊農 そうですね。今現在、「私の専門は情報学」と明言する人はあまり多くないかもしれません。情報学はまだ新しい学問なので、情報学にいなから専門としては画像処理や自然言語処理などのコンピュータを用いた研究をされている人が多いですね。実際に私は言語学者ですし、情報学は知識や知能に関して面白い研究をやっている人が集まる場であってほしいと思っています。

福島 突然ですが、実はスパイ小説が好きでして。「インフォメーションとしての情報」とは違う、「知的に分析された情報すなわちインテリジェンス」にとっても関心があります。盲ろう者に通訳者を介して提供される情報っていわばインテリジェンスとして加工された情報なんですよ。たとえばCIAのエージェントと同じような。あるいは情報分析官(アナリスト)のような役割を果たさないといけないんですよ、通訳者というのは。まあ、といっても誰もあんまり反応してくれないんですけど(笑)。CIAってCentral Intelligence Agencyの略で1ってインテリジェンスなんですよ、インフォメーションじゃないんです。確か。

坊農 確かに情報学はインフォメーションをそのまま扱わず、情報をインテリジェンスやナレッジとして加工しているという考え方に近いと思います。私の代わりに言い当てていただきました(笑)。

福島 私はメールの読み書きや文書作成にこの点字ディスプレイを使っています。このデバイス自体は韓国製なんですけど、ソフトウェアはご自身全盲

で、社会学者でもある静岡県立大学の石川准さんという方が開発されたものです。当事者の視点に立って作られたものでとても使い勝手がいいんです。

福島 先ほど、情報学や工学に対する要望を言うというお話でしたが、先に話してしまいますね。この点字デバイスでは読めないページがあります。1つは画像や動画で、もう1つはJavaScriptで書かれていて随時更新される株価のような情報です。たとえば折れ線グラフのようなものに対し、人間は大まかな傾向を見たり、代表的な数値を見るだけでも意味があるのです。そういった画像や動画から人間が認知的に得る「大まかさ」を機械的に文字化するといった手法がないかと考えています。もしかすると研究されているのかもしれませんが、実用レベルにはなっていない。いまのままでは我々にとってはそういう情報はゼロなのです。情報がゼロであるほど少ない情報はないわけです。飛び石的な情報でもいいですし、情報の意味はこちらで解釈するので、ひとまず、情報がラフでいいので欲しい。このあたり、「曖昧さ」という部分を文字として抽出するのが機械的に難しいのだろうと思います。

坊農 おそらく株価だったり折れ線グラフなどの数値情報は、どのあたりを大まかな情報として取り出してくるべきなのかが、躊躇するのだろうと思います。どこに「意味」を見出せば情報として正しいのかといったような。

福島 提供される大まかさや曖昧さに躊躇するユーザは受け取った情報をシャットアウトしたらいい。今の問題は、情報がゼロだから我々に選択の余地がないということです。

キラリと光る情報とそこそこの情報

福島 私はいまテレビが見られないのですが、点字に書き起こしてもらって見た経験があります。ドラマなどは視覚情報ですから、セリフ以外にもいろいろと補完してもらわないと伝わらない。しか

し、すべてを補完してもらうだけで状況が理解できない。そういったときに情報の取捨選択が必要だと思うんです。たとえば、野球中継を見ていると実況アナウンサーが絶対言うこととあまり言わないことがある。バッターアウトとかファウルとかは必ず言う。しかし、それがどんな球だったのかなどは状況に合わせて言ったり言わなかったりする。こういう場合、蓋然性が高いものから低いものまで正規分布しているのではないかと思います。主観的だったり個性的な情報は正規分布の低いところに入ると思うんですね。この出現頻度の小さな個性的な情報は面白い。いわば、「キラリと光る情報」です。ただし、それだけでは全体像がつかめないのも、一方で、最低限のもの、「そこそこの情報」はね、表現してもらおうとか、そういう取捨選択が必要だと思うんです。

坊農 野球中継のお話、面白いですね。ただ三振と言われるだけでは、その場の状況が分からない。正規分布の低いところに入ってしまってもかもしれませんが、どんな風にバッターがバットを振り切ったとかそういうポイントになる情報がほしいわけですよ。

福島 そうですね。たとえば、昔の巨人の長嶋なんかは三振するとき思い切り振り切って空振り三振したり、打つときもいい球ばかりを打つんじゃなくて顔の近くに来たボール球を打ってヒットにしたりして観客を沸かせることがあったわけですよ。つまり、「面白さ」を演出するんですね。人間にとっての面白い、キラリと光る情報を選択できる人工知能なんかができれば情報がとても豊かになるだろうと思うんです。そして、その情報の豊かさを支えるものが、基本的な情報としてのいわば情報のインフラ整備なのだと思います。

コミュニケーションのインフラ

坊農 情報のインフラと聞くとネットワークとかそういうものをイメージしてしまうのですが。

福島 経済のインフラというと道路を整備したり、

電気やガス、水道を整備したりする、いわゆる生きていく上での最低限のハードを整備することになるかと思います。そこで私は人が生きていく上での最低限必要な情報とは何かを考えるわけです。私は盲ろう者になってみて感じるのは、ある一定のコミュニケーションや一定の情報がないと人間は魂のレベルで死んでしまうということです。実際に死んでしまう人はいます。なぜ彼らは死んでしまったのか。おそらく、コミュニケーションしたり情報を得ることができなかった。人間が本来的に持っている欲求が満たされないという苦悩が蓄積されていくんですよね。すなわち、最低限ないと死んでしまうような情報の質や量があるんじゃないかと思います。それが私は対話だと思っています。すなわち、対話情報さらには会話情報。他の人とやりとりしているのが大切に機械と向かい合っていたり、本を読んでいるだけでは不十分なんです。盲ろう者1人だけだと真空の中に浮かんでいるだけ。自分自身の存在も分からない。存在の鏡として相手がいる、コミュニケーションという反射があって初めて自分の存在が分かる。しかし、それだけだと世界、あるいは社会の中にいるという実感が湧かない。そこに3番目の人間がやってきて、2人のやりとりを見たり、3人で互いに話すことによって初めてそこに小さな社会が作られる。そこで私たちは2人きりではなくて外に広がっているという実感が生まれるんです。こういうことがコミュニケーションのインフラというものなんだろうと思います。

キーパーソンのなすべきこと

坊農 コミュニケーションのインフラ、その言葉とでもしっくりきます。近年、情報保障の重要性などが叫ばれています。学会や研究会でろう者や盲ろう者が当事者研究をしていくには、社会はどのような工夫をしたらいいでしょうか？

福島 そうですね。まず、その領域でキーパーソンになる人が情報保障の重要性を多方面に伝えてい



くことが大切だと思っています。たとえば、ろう者などは自分の努力（筆談や読唇）で聴者とのコミュニケーションの問題をクリアしようとする人がいますが、そこはあえて、努力するのではなく、情報保障がなければできないことは何かを提示していくことが大切だと思っています。日常的に通訳を入れてもらうように訴えていく活動が大切なのです。また通訳は授業や会議の大事な場面だけを訳すのではなく、休み時間などのカジュアルな情報も訳すことが大切です。その理由は、人事などの大事な話の多くは、会議途中の休憩時間に決まったりすることがあるからです。それと、たとえばエレベーターで乗りあわせたときの数秒とか10秒間くらいのちょっとした雑談で、案外と重要なことが動いていったりしますよね。それぞれの領域のキーパーソンが何ができなくて何ができるのかを明確にして、業務補助してもらうことにより、後進が道を進みやすくなります。

海外の動向

坊農 先年アメリカに1年滞在されていたようですが、向こうでの生活はいかがでしたか。

福島 そうですね。アメリカにはADA^{☆2}があります。しかし、それがかえって盲ろう者の支援に対して裏目に出ているという印象を受けました。

☆2 障害を持つアメリカ人法 (Americans with Disabilities Act of 1990).

ADA との関係で、盲ろう者と聴覚障がい者への支援の問題を考えてみますと、ADA は主に聴覚障がい者への支援を念頭につくられているように感じます。盲ろう者のそれぞれの細かな事例に合致しない。アメリカは ADA があることに安心して、盲ろう者独自の情報保障や支援の検討が進んでいないように思います。そういった現状を見て少々ショックを受けました。

坊農 私は先日触手話に関する言語人類学の論文^{☆3}を読みました。触手話熟練化運動 (pro-tactile movement) なるものがシアトルの盲ろう者コミュニティで始まっているそうです。これは、ろう者のための言語である手話をそのまま触って触手話にするのではなく、触手話として読みやすく、また3人以上で触手話会話ができるように積極的に手話の形状を変更させる活動です。アメリカにはこういった活動があることから、盲ろう者コミュニティの活動は活発なのかと思っていましたが、福島さんの印象はそうではないのですね。

福島 触手話熟練化運動ですか。それは存じ上げませんでした。確かにシアトルは昔から盲ろう者コミュニティの活動が活発です。そういった流れからきた運動かもしれません。私は実は盲ろう者同士の会話はあまり落ち着きません。なぜだか分かりますか。

坊農 うーん、なぜでしょうか。分かりません。

福島 盲ろう者同士で外で会って話すということはそこに最低でも2名もしくは4名の通訳介助者がいるわけです。私たちは2人で対話している

ように思っても、周りにはたくさん人がいると落ち着きません。あと、私の場合は立場上、その場のグループ全体を見渡す必要があります。なので2人だけの隔離されたコミュニケーション・認知空間に閉ざされてしまうと周辺に気が配れなくなってしまうのです。

指文字コミュニケーション分析

坊農 今日は本当にありがとうございました。3時間近くお時間いただいてしまいました。おそらく今回の特集記事には収まりきりませんので、続きは論文にさせてください。そして、今回この対談を福島さんと指文字通訳の方々に了解いただいてビデオ撮影していますが、福島さんと指文字通訳と私の会話それ自体を分析してみたいと思っています。コミュニケーション研究としてとても貴重な資料になります。今後も意見交換させていただいて、なんらかの形で共同研究ができれば嬉しいと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

福島 こちらこそよろしく願いいたします。

(2015年3月25日受付)

福島 智 | fukusima@rcast.u-tokyo.ac.jp

盲ろう者として日本で初めて大学に進学、東京都立大学大学院人文科学研究科教育学専攻博士課程単位取得退学、同大助手、金沢大学教育学部助教授、東京大学先端科学技術研究センター助教授を経て、2008年より教授。博士(学術)。

坊農真弓 (正会員) | bono@nii.ac.jp

神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程修了。ATRメディア情報科学研究所研究員、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 CLIC 客員ポスドク研究員、テキサス大学オースティン校人類学部客員研究員等を経て、2009年より国立情報学研究所・総合研究大学院大学助教。2014年より同准教授。博士(学術)。

^{☆3} Terra Edwards : From Compensation to Integration : Effects of the pro-tactile movement on the sublexical structure of Tactile American Sign Language. Journal of Pragmatics 69., pp.22-41(2014).